

氏名（本籍）	片山 ふみ（栃木県）
学位の種類	博士（図書館情報学）
学位記番号	博 甲 第 7080 号
学位授与年月日	平成26年 3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	図書館情報メディア研究科
学位論文題目	児童書出版社の価値志向と利益志向：日本における児童書 専門出版社の図書出版活動に着目して

主査	筑波大学	教授	博士（比較社会文化）	後藤 嘉宏
副査	筑波大学	教授	博士（文学）	綿拔 豊昭
副査	筑波大学	教授	修士（図書館情報学）	平久江 祐司
			修士（教育学）	
副査	筑波大学	教授	博士（文学）	松本 浩一
副査	筑波大学	教授	社会学修士	仲田 誠

## 論文の要旨 (2,000 字程度)

本論文は、日本における児童書専門出版社の出版活動に表れる特徴を、出版社社員自身の志向（価値志向、利益志向）から明らかにするとともに、その志向がどのように達成されるのかに検討を加えたものである。出版活動をこのような視点から論じる研究はいくつかみられるが、児童書専門出版社に特化したものはなく、その点で先駆的な研究である。

なお、本論文内において、児童書出版社とは、児童書専門出版社と総合出版社の児童書部門（以下、総合出版社）を指している。そのうえで、著者の力点は児童書専門出版社に置かれている。以下、論文の構成に従い、内容を要約したい。

序章は、研究全体の導入部である。先行研究を振り返ったうえで、研究の射程や目的を明らかにし、研究全体の方法論について説明される。また、本論文で用いられる基本的な用語についてもここで解説されている。著者は、総合出版社に比べ市場で不利な状況にある児童書専門出版社は、なんらかの価値的な動機が強いのではないかという問題意識をもち、この観点から、出版活動を分析する指標として、価値志向と利益志向を提示する。このふたつの志向は、ウェーバーの価値合理的行為と目的合理的行為から着想を得た理念型的な枠組みで、さらにこれを補う視点としてウェーバーの行為論を発展させたと自ら語るブルデューの、非経済資本（象徴資本、社会関係資本）と経済資本の観点をも提示している。これらの観点によって、児童書専門出版社の出版活動の特徴を明らかにするという大目的が示される。

第1章では、児童書専門出版社がどのような目的で出版活動を行ってきたのかの歴史の変遷を文献調査によって明らかにする。分析された文献として、各社の社史、『日本書籍出版協会 50 年史』、『日本児童図書出版協会四十年史』、『日本児童図書出版協会四十年史補遺』、児童文学史・絵本史関連書籍、出版史関連書籍、出版者の回顧録、新聞記事などが用いられている。横に切る（時代ごとの）分析と縦に切

る（出版社ごとの）分析の両面について、ブルデューのいう資本の転換のなされ方を考察している。これらの出版物の特徴や、出版意図、各社の企業理念等、様々な点を総合し、次に示すような結果を得ている。

児童書専門出版社は、時代を超えて読み継がれる出版物の制作をめざしており、その実現のために社会関係資本や象徴資本の蓄積を行うとともに、それを経済資本に転換させている。具体的には、経済資本の豊かな大手総合出版社に対し、児童書専門出版社は無私無欲という面を押し出して象徴資本を蓄え、業界における権威と発言力を高めようとする。さらに児童書専門出版社は、同業者や、学校図書館関係者との人脈を築き（社会関係資本の蓄積）、編集や営業の両面で、確実な投資を行うことができるビジネスモデルを作り上げ、学校図書館市場を独占領域にすることによって、書店をベースに活動する総合出版社とは別の戦略で経済基盤を得てきた。

第2章では、出版活動の具体的な場面において価値と利益のそれぞれがどのように志向されているかを聞き取り調査で追うことで、児童書専門出版社の現在の目的を明らかにしている。具体的には、児童書専門出版社は、学校図書館ルートでは企業理念を措いて利益の追求をめざし（利益志向）、書店ルートでは企業理念にのっとりた価値を追求しようとする（価値志向）側面があることを、詳細な聞き取り調査の結果から導いている。

本論文全体の中核として位置づけられるこの章では、児童書専門出版社9社と総合出版社9社の経営者を含む社員に聞き取りを行い、児童書専門出版社、総合出版社それぞれに共通する意識を把握するとともに、熟練社員にはライフヒストリー調査の手法に基づいた別の調査を行い、個別的な視点によっても社員の意識を把握している。

第3章では、第1章、第2章の結果を踏まえ、学校図書館市場に着目し、児童書専門出版社の目的が、出版社以外の周辺組織との関係のなかでどのように達成されているのかを明らかにしている。編集プロダクションへの調査によって、調べ学習用の資料に代表される学校図書館向け書籍の制作面を把握するとともに、全国学校図書館協議会、学校図書館図書整備協会、図書館流通センター、学校図書館職員への調査によって、それらの流通面を把握している。さらに既存のデータを統計的に分析することによって、得られた証言を量的にも裏づけている。これらから、児童書専門出版社は、学校図書館向け書籍の制作を編集プロダクションに一任することで、安くコンスタントにライフサイクルの短い商品を作っていることを指摘するとともに、課題図書・選定図書の選定において総合出版社よりも児童書専門出版社が優先的に選ばれてきた可能性を指摘し、制作、流通の両面で児童書専門出版社が利益を得られる環境ができている状況を描いている。

終章はまとめの章にあたる。第1章から第3章の結果を整理したうえで総合し、「本来、価値を高めるためのメカニズムが、利益を生み出すメカニズムとして機能している」という知見を導いている。これは、次のような状況を示す。業界全体が価値を志向してきたがゆえに、ロングセラーを生み出し、そのロングセラーが現在もなお、書店の書棚を占めている。よって必然的に、書店に新刊書が陳列される余地が狭まり、営業力の弱い児童書専門出版社は、書店の棚に食い込むために、課題図書などに選ばれる仕組みを制度化せざるを得ない。また、それだけでは経営が成り立たないため、価値実現の対象として当初意識されていた学校図書館市場も利益を得るための市場と位置づけるようになる。このような点で「本来、価値を高めるためのメカニズムが、利益を生み出すメカニズムとして機能している」という逆説的状況を示したところに本研究全体の意義があると結論づけている。

## 審 査 の 要 旨 (2,000 字以上)

### 【批評】

本論文は、著者が図書館情報大学図書館情報学部在学中より長年にわたり取り組んできた、児童書出版社研究の集大成である。児童書専門出版社に焦点をあて、その出版活動の歴史と現状を、価値志向と利益志向、あるいはブルデューの経済資本と象徴資本といった観点から、明らかにしている。研究手法としては文献調査と聞き取り調査を主体とし、さらに裏づけのために既存のデータの統計分析なども行いながら、手堅くまとめられている。

本論文の優れている点として、第一に先行研究においては区分が曖昧で研究者の主観に委ねられていた、出版社のふたつの側面（本研究においては、価値志向、利益志向）を、ウェーバーの行為の類型の議論やブルデューの社会関係資本、文化資本、経済資本の関係の理論を下敷きに、操作的に定義づけ直して考察している点が挙げられる。これによって、価値志向と利益志向の振り分けについて従来の研究に比して格段の客観性、実証性をもたらすことに成功していて、この点は非常に評価に価する。

本研究の成果の第二点として、児童書専門出版社と総合出版社の児童書部門について、編集を中心に経営、営業といった様々な職種の人びとにも広く聞き取り調査を行って、議論をまとめている点を指摘できる。そのことによって従来の研究が編集の意向のみを追っているのに対して、本研究は児童書専門出版社を総体として捉える試みに成功している。

第三に業界においてこれまでタブー視されてきた問題に正面から切り込もうとしている点が評価される。具体的には、課題図書や編集プロダクション利用などの問題である。例えば、課題図書については児童書専門出版社の図書がそれに選ばれやすい時代が続いていたことを、聞き取り調査とそれを裏づける統計データの双方から実証した点は大きなメリットといえる。さらにその反面、熾烈な書店での棚争いのなかで児童書専門出版社は総合出版社との対抗上、課題図書に選ばれることに賭けざるを得ない状況も描き、課題図書が児童書専門出版社の価値志向と利益志向の双方を満足させるものである点を抉りだした点は非常に大きな成果であるといえる。

第四に出版界に《意図と結果のパラドックス》（マートン）に通じる事例を見出した点は、新たな知見である。児童書出版界全体が価値志向の側面が強く、永く読み継がれる作品を志向する。その結果、大手の総合出版社の児童書部門およびそのほとんどが中小出版社に属する児童書専門出版社の制作したロングセラーが、いつまでも書店の棚を占拠する。そうすると新刊書に充てられるべき書店の棚を確保するのに必要な営業力をもっていない、児童書専門出版社は、書店の棚における新刊書については課題図書に頼らざるを得ず、課題図書に選ばれることでようやく棚の一冊分を確保できることになる。しかも中小出版社であるため課題図書以外の書店ルートでの図書の刷り部数は少ないため、基本的に書店ルートでは赤字になる。そこで書店ルートでの価値志向を貫くために、日常においては学校図書館ルートで利益志向をうかがわせざるを得なくなる。このように児童書出版の業界全体にある価値志向が、結果として利益志向的な行動に走らせるという逆説を抉りだした点は、非常に高く評価されよう。

第五に前項に少し触れたように、学校図書館が児童書専門出版社にとって利益志向の場になっている可能性を指摘した点が挙げられる。また、この状況を助長する背景として学習指導要領の改訂や、学校図書館職員の職制上の問題が影響しているということをいくつかの事例から示している。

このように、本研究は図書館情報学および出版論の既往研究において未着手の領域である、児童書出

版社の研究に着手し、周辺組織への調査を通じて児童書出版社の歴史と現状について研究を展開し、着実な成果を得ることができた。その意義を高く評価することができる。

なお、今後本論文で示された研究は、社会全体の流れのなかに位置づけることで、また量的な側面を充実させることで、より一層の発展が期待できる。これらについて具体的に述べる。前者については、ポストモダンの時代に住む我々にもモダニズム的な普遍的価値が児童書の世界では通用しているのか否か、言い換えると児童書の世界と外の世界との連続性の有無を、みていくことによって、児童書出版の世界観を浮き彫りにすることが可能となろう。さらに後者については、学校図書館市場で実際に得られる利益について統計的に把握することや、児童書そのものの内容分析を組み合わせることによって、質的調査の限界を量的に補足することが可能となるであろう。本論文では価値志向、利益志向の振り分けに客観性をもたせようと努力しているものの、やや強引な部分もいくらか見受けられる。また出版者側の意図を汲む限り、経済資本と社会関係資本の相互転換の可能性は成立するが、それが実態とどの程度かみ合っているのかについてまでは言及されてはいない。これらの課題もいま述べたような量的な研究を組み合わせることで、十分に乗り越えられる。

本論文をベースにして、児童書専門出版社の価値志向と利益志向をさらに追究していくことによって、図書館情報学、出版論、行為論等の研究分野にさらに貢献する研究として展開していくことが期待される。したがって、本論文は学位論文として十分な内容をもつものと判断される。

### 【最終試験結果】

平成 26 年 1 月 6 日、図書館情報メディア研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。引き続き、「図書館情報メディア研究科博士後期課程の学位論文の審査に関する内規」第 1 2 項第 2 号に基づく最終試験を行い、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 【結論】

よって、著者は博士（図書館情報学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認められる。